

立正大学150周年記念事業企画「江戸・東京の地図展」 —正井泰夫名誉教授 寄贈地図コレクション展示の記録—

鈴木 厚 志* 堀 真 紀** 貝 沼 恵 美* 原 美 登 里*

キーワード：江戸・東京、地図展、正井泰夫名誉教授

I. はじめに

2022年は、立正大学学園創立150周年の節目の年であった。本フォーラムは、その記念事業として位置付けた「地球環境科学部ウイーク」の催事の1つ、「江戸・東京の地図展」の催事、出品目録、展示解説を収録した全記録である。

「江戸・東京の地図展」（以下、地図展と略す）を開催するきっかけは、2012年11月20日の正井泰夫立正大学名誉教授の逝去に伴い、翌年5月にご子息より、蔵書と地図類を立正大学へ寄贈したいと申し出があり、同年6月の地理学科学科会議にて承認されたことに始まる。同年8月には、正井家より一時保管場所の立正大学熊谷図書館保存書庫への搬入が行われた。その時、図書類を梱包した引越し用段ボール箱の数は約300個、一枚物の大判地図を収納した筒は30本以上にのぼった。それらは、いずれも和・洋の図書、雑誌、事典・辞書、地図帳・地図集、国内外の訪問先にて収集した資料や一枚物の地図類に及んだ。これらの開封作業と分類・整理は、鈴木厚志、松尾忠直助教（現データサイエンス学部専任講師）、地理学科教務補助員、大学院生等が担当し、その作業は現在も継続中である。

2022年現在、故正井名誉教授の寄贈図書と地図類の存在は、地理学科専任教員と熊谷図書館学術情報課職員の周知に留まっており、筆者等は公開の機会を窺っていた。こうした背景のもと、この度の地図展は立正大学熊谷図書館の協力を得、共同で開催するはこびとなった。地図展は2022年6月3日～同21日、立正大学熊谷キャンパス19号館（アカデミックキューブ）1階のRiLLFore入口を会場として開催した。

II. 地図展の概要

立正大学学園開校150周年事業に向けた地球環境科学部提案の事業である「地球環境科学部ウイーク」は、2022年1月10日の申請時、次の4つの内容で構成した。

④を除く事業名は、いずれも仮称である。

- ① 学生による「SDGsシンポジウム」
- ② 故正井泰夫名誉教授所蔵「江戸・東京の地図展」
- ③ リアル教材を使用した「アジアの民族衣装と民具展」
- ④ 2022年度立正地理学会研究発表大会

事業総額は85万円。その内の60万円に対し、助成申請を行った。これらの申請に対し、同年2月3日付で担当事務局より、④を除く内容について助成を承認する返答があり、30万円の助成金が認められた。

「地球環境科学部ウイーク」は、2022年5月28日（土）～同6月4日（土）に、①～④の内容を連続して行うことを想定し企画した。①はオンライン上で実施し、②と③についてはオープンキャンパス等の大学行事に協力することもあり、当初の予定を延長し展示を行った。④は6月4日（土）に開催した。以下、②の「江戸・東京の地図展」について、その概要を記載する。

II. 1 催事

テーマ：「江戸・東京の地図展 —正井泰夫名誉教授 寄贈地図コレクション—」

期 間：2022年6月3日（金）～同21日（火）〈当初予定より4日間延長〉

会 場：立正大学熊谷キャンパス アカデミックキューブ（19号館）1階 RiLLFore入口前

内 容：江戸期から明治期後期までの14点の地図を解説とともに年代順に配列し、江戸・東京の発達とその変貌を概観する

* 立正大学地球環境科学部

** 立正大学図書館熊谷学術情報課

図1と図2は、展示会場にて配布した展示案内用チラシの両面であり、展示地図目録と正井泰夫先生のプロフィールを記載した。その内容は、Ⅲ. 2と表1に掲載した。地図展案内チラシ中の目録(図2)での地図数は13となっているが、実際には14点を展示した。

地球環境科学部ウィーク

150th
RISSHO

江戸・東京の地図展

正井泰夫名誉教授 寄贈地図コレクション

2022年6月3日(金)～17日(金) AC1階 RiLLFore 入口前

寄贈地図を初公開します



正井泰夫先生の著作と写真 (最終講義時、2000年1月撮影)

正井泰夫先生(故人)は、都市地理学や都市地図の研究者として、実に多くの著作や地図を残されました。この地図展は、2013年にご家族より地球環境科学部へ寄贈された図書や地図の一部をもとに企画しました。江戸期から明治期後期までの地図や図を時代順に配列し、展示します。地図からは、城下町のしくみや、施設の配置や整備、市街地の拡大、交通機関の整備と発達、ウォーターフロントの開発、郊外の変貌などがわかり、さまざまな視点から江戸・東京の変化を楽しむことができます。

図1 地図展案内チラシ表

展示地図目録

番号	図名	著者名	出版元・社名	発行年次	備考
1	新江戸図		豊林康彦建築計画蔵版	文政11年	複製
2	寛永町江戸城本丸・二の丸	復元巻証 内藤 豊	教育出版	寛永期	数冊出版 複製
3	江戸之下町(寛永町その一(北 部)、その二(南部))	編集 中村勝夫	国立歴史民俗博物館	寛永期	
4	寛永町江戸図		語りは青木伊太郎氏?		太田道灌時代
5	江戸大蛇襲大川内角				安政の地震
6	大江戸地理空間図	正井泰夫	「2万分の1江戸の都市 的土地利用図」4訂版		寛永・慶応年 間 江戸の町 景使用
7	江戸ノ景観	不明			地図城からの 引用か?
8	明治元年東京全図	菊屋幸三郎	大橋堂	明治元年 改正再刷	
9	輸入東京御城全	山村清助	大倉四郎兵衛	明治15年	家傳蔵蔵版 「江戸から東 京へ」刊行記 巻複製 中央公論社
10	東京一日新圖	武部龍三郎	田村隆之助	明治30年	鳥居園
11	改正東京新全圖	中村隆之助	文求堂	明治38年	数冊出版 複製
12	東京町名新編	福田雄次郎	錦光館書店	明治39年	数冊出版 複製
13	大日本東京全圖之圖	手塚文義・ 福田十蔵	精華堂	明治40年	鳥居園

正井泰夫先生プロフィール (1929(昭和4)年～2012(平成24)年)

正井泰夫先生は、1953年に東京理科大学地理学専攻を卒業し、翌年4月に同大学院(地理学専攻)に進学。大学院在学中にフルブライト留学生となり、1960年にミシガン州立大学よりPh.D.を取得。さらに帰国後の1962年には東京理科大学より理学博士の学位を取得されました。1963年に立正大学地理学専攻講師となり、1964年7月に同系の水女子大学へ転任し、1965年に助教授、1974年に教授に昇進しています。1975年には筑波大学地理学系へ転任し、教授として複数の研究科や学際を兼任しました。1984年9月、再び立正大学地理学教授として転任し、多くの学部生・大学院生の指導にあたりました。1998年4月に立正大学地球環境科学部へ移籍し、2000年3月、立正大学を停年により退職されています。同年4月、立正大学名誉教授。

この間正井先生は、日本学会の地理学研究会連絡委員会幹事、太平洋学術評議会委員、地質学評議会委員、日本地理学会常任委員3期、日本国際地学会会長4期、日本地理教育学会会長、立正地理学会会長2期、人文地理学会監事、東北地理学会評議員、地理科学学会評議員、歴史地理学会評議員、関東都市学会理事、国際地学会都市地質委員会委員(名誉会員)、太平洋学術会議(Pacific Science Assoc.)カウンシルメンバー、(一財)地図情報センター理事・理事長、(一財)日本地図センター理事、(一社)環境情報科学センター評議員、(公財)日本自然保護協会評議員を歴任されています。

代表著作として、『都市の環境』(三省堂)、『東京の生活地図』(時事通信社)、『日本都市の比較研究』(古今書院)、『アメリカとカナダの風土』(二宮書房)、『都市地図の機』(原書房)、『城下町東京』(原書房)、『江戸・東京の地図と景観』(古今書院)などがあります。このほか、単著、共著、監修を合わせた図書74冊を出版し、地理学、地誌学、地図学等の学術的深化と、社会的普及に多大なる貢献をされました。

図2 地図展案内チラシ裏

Ⅱ. 2 予算

前述したように、本地図展は事業タイトル「地球環境科学部ウィーク」の実施事業の1つとして事業申請を行った。申請に伴う予算額は30万円。決定額も同じである。2022年12月現在の支出総額とその内訳は次のとおりである。

支出総額：157,368円 (いずれも学長政策費 周年記念事業費)	
内 訳：消耗品費 (糊付きパネル、レーザー墨出し器等)	34,718円
印刷製本費 (B2版大判プリント、ポスターカラープリント等)	119,500円
アルバイト代 (学生による展示作業補助)	3,150円

Ⅱ. 3 準備

地図展の企画・準備にあたっては、当初、地理学科より鈴木厚志(チーフ)・岡村 治教授・原美登里准教授、環境システム学科より河野 忠教授を担当とした。しかし、年度末から年度当初の業務との関係から、地図展の開催・設営にあたっては鈴木厚志・貝沼恵美教授・原美登里准教授のいずれも地理学科教員と、立正大学図書館熊谷学術情報課の島田貴司課長と堀 真紀課員に協力頂いた。地図展開催の準備と関連する作業内容は、次のとおりである。以下では作業者の敬称は略す。

- 2月17日(木)：展示地図選定(於熊谷図書館保存書庫地下1階、鈴木厚志・原美登里)
- 3月10日(木)：展示地図選定(於熊谷図書館保存書庫地下1階、鈴木厚志・貝沼恵美)
- 5月6日(金)～14日(土)：展示地図解説執筆(於熊谷図書館保存書庫3階 簡易閲覧室、鈴木厚志)
- 5月17日(火)：パネルへの貼り付け、展示レイアウト検討、地図の写真撮影(於熊谷図書館保存書庫3階 貴重資料閲覧室、鈴木厚志・堀 真紀)
- 5月19日(木)：パネルへの貼り付け、展示レイアウト検討(於熊谷図書館保存書庫3階 簡易閲覧室、鈴木厚志・堀 真紀・貝沼恵美)
- 6月2日(木)：展示場所の設営と地図展示(於19号館1階 RiLLFore入口前、鈴木厚志・堀 真紀・学生アルバイト)

6月17日（金）：展示用イーゼルを地理学科へ返却
（於19号館1階RiLLFore入口前、鈴木厚志）

6月21日（火）：撤収と片付け（於19号館1階RiLLFore入口前、鈴木厚志・堀 真紀・学生アルバイト）

Ⅲ. 展示地図と解説

Ⅲ. 1 展示方法

展示場所は、学内行事や学生の動線を考慮し、熊谷キャンパス19号館（アカデミックキューブ）1階奥のRiLLFore入口前とした。展示室を使用したわけではないので、展示は、地図展紹介パネルや地図をイーゼルに立て掛ける（写真1）、直接壁に貼り付ける（写真1）、パネルを机の上に置き壁に立て掛ける（写真2）等の方法で行った。



写真1 イーゼルに立て掛けた地図展案内パネルと壁に貼り付けた大型地図

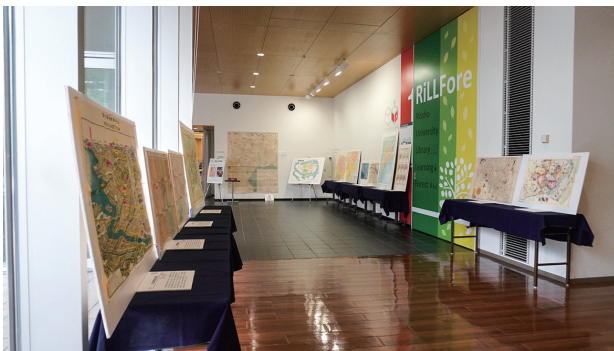


写真2 江戸東京の地図展全景

Ⅲ. 2 解説

本節では、展示案内チラシに記載した地図展の趣旨と故正井泰夫名誉教授のプロフィールと14点の展示地図解説を掲載する。なお、本節に掲載する文章は、鈴木厚志が引用文献等をもとに執筆した。

地図展の趣旨：

正井泰夫先生（故人）は、都市地理学や都市地図の研究者として、実に多くの著作や地図を残されました。この度の地図展は、2013年にご家族より地球環境科学部へ寄贈された図書や地図の一部をもとに企画しました。江戸期から明治期後期までの地図や図を年代順に配列し、展示します。地図からは、城下町のしくみ、施設の配置や整備、市街地の拡大、交通機関の整備と発達、ウォーターフロントの開発、郊外の変貌などがわかり、さまざまな視点から江戸・東京の変化を楽しむことができます。

正井泰夫先生プロフィール〈1929（昭和4）年～2012（平成24）年〉：

正井泰夫先生は、1953年に東京文理科大学地学科地理学専攻を卒業し、翌年4月に同大学院（地理学専攻）に進学。大学院在籍中にフルブライト留学生となり、1960年にミシガン州立大学よりPh.D.を取得。さらに、帰国後の1962年には東京文理科大学より理学博士の学位を取得されました。1963年に立正大学地理学科専任講師となり、1964年7月にお茶の水女子大学へ転任し、1965年に助教授、1974年に教授に昇進しています。1975年には筑波大学地球科学系へ転任し、教授として複数の研究科や学類を兼務しました。1984年9月、再び立正大学地理学科教授として着任し、多くの学部生・大学院生の指導にあたられました。1998年4月に立正大学地球環境科学部へ移籍し、2000年3月、立正大学を停年により退職されています。同年6月、立正大学名誉教授。

この間正井先生は、日本学術会議の地理学研究連絡委員会幹事・太平洋学術研連委員長・地図学研連委員会委員、日本地理学会常任委員3期、日本国際地図学会会長4期、日本地理教育学会会長、立正地理学会会長2期、人文地理学会監事、東北地理学会評議員、地理科学学会評議員、歴史地理学会評議員、関東都市学会理事、国際地図学会都市地図委員会委員長（名誉会員）、太平洋学術会議（Pacific Science Assoc.）カウンスルメンバー、（一財）地図情報センター理事・理事長、（一財）日本地図センター理事、（一社）環境情報科学センター評議員、（公財）日本自然保護協会評議員を歴任されています。

代表著作として、『都市の環境』（三省堂）、『東京の生活地図』（時事通信社）、『日米都市の比較研究』（古今書院）、『アメリカとカナダの風土』（二宮書店）、『都市地図の旅』（原書房）、『城下町東京』（原書房）、『江戸・東京の地図と景観』（古今書院）などがあります。このほ

か、単著、共著、監修をあわせて図書74冊を出版し、地理学、地誌学、地図学等の学問の深化とそれらの社会的普及に多大なる貢献をされました。

展示解説：

展示地図は表1に示すとおりである。「1. 御江戸図」と「4. 長禄年間江戸図」以外は、表す地図の年代順に配列した。

表1 江戸・東京の地図展 展示地図一覧

番号	図名	著者名	出版元・社名・	発行年次	備考
1	御江戸図		書林須原屋茂兵衛蔵版	文政11年	
2	寛永期江戸城本丸・二の丸圖	復元考証 内藤 昌	教育出版	寛永期	教育出版 復刻
3	江戸之下町復元図その一（北部）、その二（南部）	編集 中村静夫	国立歴史民俗博物館	嘉永期	
4	長禄年間江戸図		摺りは青木伊太郎氏？		太田道灌時代
5	江戸大地震大火方角附				安政の地震
6	大江戸地理空間図	正井泰夫	「2万分の1江戸の都市的土地利用図」4訂版		嘉永・慶応年間 江戸切り絵 図使用
7	江戸ノ發達	不明			地図帳からの 引用か？
8	明治元年東京全圖	端屋幸三郎	大橋堂	明治元年 改正再刻	
9	繪入東京御繪圖全	山村清助	大倉四郎兵衛	明治15年	愛読愛蔵版 「江戸から東京へ」刊行記念複製 中央公論社
10	東京一目新圖	武部龍三郎	田村鑑之助	明治30年	鳥瞰図
11	改正東京新全圖	中村政之助	文求堂	明治38年	鉄道路線図
12	東京附近明圖	福田滋次郎	精光館書店	明治39年	鉄道路線図
13	大日本東京全圖	手塚文義・ 福田十蔵	精華堂	明治40年	鳥瞰図
14	大東京鳥瞰図	石川真琴	大日本文化協會	大正10年	鳥瞰図

1. 御江戸図

出版元・社名：書林須原屋茂兵衛蔵版

発行年次：文政11（1828）年

江戸後期の市中図。江戸城を囲む内堀と外堀、そして隅田川や中川が明瞭に記載されている。江戸城周囲の御三家（紀伊家・尾張家・水戸家）や御三卿（田安家・一橋家・清水家）の屋敷地、さらに諸藩大名の上屋敷・中屋敷・下屋敷の位置も明瞭である。図の周囲に着目すると、「ハタ」や「田」と記載される農地が市街地を囲み、近郊農業地帯となっていたことも読み取れる。品川宿北西方向の泉岳寺そばの「兼教寺」は、立正大学学園発祥（明治5（1872）年）の地でもある。

2. 寛永期江戸城本丸・二の丸圖

著者名：復元考証 内藤 昌

出版元・社名：教育出版復刻

発行年次：寛永期

三代将軍家光の時代、江戸城の中樞施設（本丸や西丸）の整備がほぼ終了し、その後本丸別館が二の丸に建設される。この図は、その時点のようすを表す。その後も増改築を繰り返すが、明暦3（1657）年1月18日より20日にかけて発生した「明暦の大火」により、これらの

大半は消失する。この火事は、江戸市街地の約3分の2を焼き尽くす。江戸城天守台、大手門、平川門の位置も確認してほしい。

3. 江戸之下町復元図 その一（北部）、その二（南部）

編集：中村静夫

出版元・社名：国立歴史民俗博物館・第一法規出版（株）

発行年次：嘉永期

嘉永期（1848～1854年）の下町復元図である。「その一」は神田川から日本橋付近まで、「その二」は日本橋の南方から築地付近まで、2枚の地図で今日の都心商業地からウォーターフロントまでをカバーしている。武家地（黄）、寺社地（アミ桃）、町地（桃）を色分けし、さらに大名屋敷、町年寄や名主、富商まで区分し地図化している。蛸殻町や鉄砲町への大名屋敷の拡大にも注目したい。

4. 長禄年間江戸図

摺りは故青木伊太郎氏（元立正大学非常勤講師）か？

長禄年間（1457～1460年）の江戸のようすを表す木版による地図である。下図となった地図は不明だが、後の江戸城の位置には「太田居城」とあり、現在の隅田川、神田川、渋谷川、目黒川の流路とその周辺の土地利用を読み取ることができる。現在の隅田川付近に住居を確認することができるものの、この時点での江戸は、ほとんど農地や平地林で覆われていた。

5. 江戸大地震大火方角附

安政2（1855）年10月2日の午後10時頃、現在の足立区付近を震源とするM7以上の地震に襲われ、江戸市中は震度6以上の揺れとなった。地図上の橙は火災発生地を示しており、隅田川の東岸の深川、西岸の今戸・駒形・吉原、江戸城周辺では神保町や大手町、霞ヶ関から虎ノ門付近、そして銀座付近も消失した。結果として、倒壊家屋は約1万5千、死者は4741名（2回目調査）と報告されている。小石川の水戸藩邸では徳川斉昭の腹心であった藤田東湖らも、この地震で亡くなった。

6. 大江戸地理空間図

著者名：正井泰夫

発行年次：1973年発行「2万分の1江戸の都市的土地利用図」の4訂版

嘉永・慶応年間の江戸切り絵図を使用し、故正井泰夫

名誉教授が自ら編集した地図である。建物利用は嘉永・慶応期の江戸切絵図、土地利用は明治前期の迅速図に基づいている。土地利用区分は、大名屋敷、一般武家地、町屋、幕府用地、寺社、農地等から構成され、さらに地図中には江戸の範囲を示す朱引（しゅびき）の線、標高10mの等高線を太線で示している。これにより、地形と土地利用との関係を読図しやすいよう工夫している。地名についても英語表記を行っている。こうした製作実績より、正井教授は国際地図学会議（ICA）の都市地図委員会において、長年にわたり座長として活躍された。

7. 江戸ノ發達

著者名 : 不明

出版元・社名 : 不明

発行年次 : 不明

著者、出版元は不明であるが、大正期から昭和初期の教科書もしくは地図帳からの引用と推測される。天正18年の徳川家入城前の江戸の市街地（赤太線）範囲の記載から始まり、ほぼ30～40年間隔でその範囲を示している。寛永期から延宝期にかけての市街地の拡大には著しいものがあり、すでに東京市の範囲（緑太線）に到達している。19世紀に入ると、いわゆる五街道に加え、大山・青梅・川越・千葉街道などに沿い、ヒトデ状や飛び地状の市街地の拡大が読み取れる。

8. 明治元年東京全圖

著者名 : 菊屋幸三郎

出版元・社名 : 大橋堂

発行年次 : 明治元改正再刻

江戸から東京への改称に伴い、それまでの「江戸全圖」を「東京全圖」と改め出版したもので、東から西、いわゆる東京湾から富士山方向を見た構図で描かれた地図である。明治期に入ったとはいえ、まだまだ江戸後期の特徴を色濃く残している。家紋に赤の印は大名屋敷、東京湾に目を転じると石川島や佃島、デフォルメされた台場も確認できる。地図の右側（北方向）には隅田村や田端村の地名とともに、広く農地が広がっている。

9. 繪入東京御繪圖全

著者名 : 山村清助

出版元・社名 : 大倉四郎兵衛

発行年次 : 明治15年、愛読愛蔵版「江戸から東京へ」刊行記念複製 中央公論社

東京の変貌が顕著となりだした時代の地図である。江

戸は東京府となり、江戸市中の範囲であった朱引内に区（明治15年時点では15区）を設置し、その周囲を郡部とした。この地図では、隅田川や皇居周辺の堀・水路をかなり強調して描いている。大名屋敷の並んだ大手町や霞ヶ関では庁舎の建設と街の整備が進み、かつての御三家や御三卿の跡地などは軍の施設や練兵場となり、広大な面積を占有する。新橋－横浜間の鉄道開通から10年を経過しており、高輪堰堤を走る機関車が客車と貨車を牽引する様子も描かれている。

10. 東京一目新圖

著者名 : 武部龍三郎

出版元・社名 : 田村鐵之助

発行年次 : 明治30年

日清戦争後に出版された地図。図名にもあるよう、東京湾上空から皇居を中心に、東京市内15区のようにすのこ目状で描いたものであり、大変見やすい地図となっている。丸の内ではオフィス街が形成されつつあり、大手町や霞ヶ関の官庁街の整備も進んできた。また、石川島と佃島のみであった埋立地も、現在の月島あたりまで拡大している。かつて、新橋駅のみであった鉄道のターミナル駅も、本所駅（現 錦糸町駅）や上野駅や飯田町駅などが整備され、周辺地域との交通手段の近代化を物語る。郊外に目を転じると、山手線の一部となる線路の敷設も確認できる。

11. 改正東京新全圖

著者名 : 中村政之助

出版元・社名 : 文泉堂

発行年次 : 明治38年

東京で市電が走り出すのは明治36（1903）年のことである。周辺地域と東京のターミナル駅とは各鉄道線が輸送を担うが、そこから市中への移動は市電が主役となる。馬車鉄道から置き換わった市電は、地図の凡例にもあるよう、東鐵線（緑）・市街線（赤）・外濠線（青）の3社が競合しあい、それぞれの輸送を担った。東鐵線はおもに上野や浅草方面と日本橋・銀座を通り品川までを担当した。市街線は皇居を取り囲み、両国・上野方面や新宿・青山・三田へと路線を延ばした。地図中では見にくい、外濠線はその名のごとく、外濠に沿った環状線であった。

12. 東京附近明細圖

著者名 : 福田滋次郎
 出版元・社名: 晴光館書店
 発行年次 : 明治39年

11の地図とほぼ同時期の東京周辺の地図であり、東は行徳付近、西は小金井付近、南は川崎、北は赤羽までをカバーする。東京の市街地を朱線で描かれた市電が通過する。この地図の製作された3年後の明治42(1909)年に「山手線」の名称が使用されるようになり、当初は「C」の字運転、続いて「の」の字運転、環状運転を開始するのは大正14(1925)年のことである。現在の山手線を越えた西側への市街地拡大は、甲州街道、青梅街道、中山道に沿った地域にほぼ限られ、武蔵野はまだまだ都市化されていないことが読み取れる。

13. 大日本東京全景之圖

著者名 : 手塚文義・福田十藏
 出版元・社名: 精華堂
 発行年次 : 明治40年

この地図の製作年時は明治40(1907)年。日露戦争終結の2年後である。現在の本所付近上空から、皇居、その先にある富士山に視点を定め、描いた鳥瞰図である。地図左下の記載より、編者は8年の歳月をかけ、手描きしたと記している。川や水路、道路を幅広く描き、モノやヒトの流れを意識した構図となっている。同時期のニューヨークは高層ビルの建設ラッシュを迎え、都市の立体化が進み出すが、東京はまだ浅草の凌雲閣(12階建て、1890年竣工)のみであった。

14. 大東京鳥瞰圖

著者名 : 石川真琴
 出版元・社名: 大日本文化協會
 発行年次 : 大正10(1921)年

東京湾品川沖上空から皇居を中心に据え、北西方向を向き描いた鳥瞰図。地図の中央部には、完成した東京駅(赤レンガ駅舎)や丸の内のオフィスビルなどが立ち並び、商工会議所や帝国劇場など、その後建て替わったものの、現在も立地する施設を多く確認できる。図の右端(東側)は北千住付近、左側(西側)は中野付近が描かれ、上部(北側)は板橋・練馬方面となっている。隅田川兩岸の煙突からは煙が上がり、すでに工業地域となっていたと理解できる。上部へ視点を転じるほど緑が多くなり、農地や平地林が広がっている。

Ⅲ. 3 関連資料の展示と広報

本地図展を開催するなか、熊谷図書館を所管する熊谷学術情報課は、本地図展に関連する図書の展示と広報を大学ウェブサイトとSNSの双方で行った。図3は地図展と関連図書一覧を紹介する立正大学図書館ウェブサイト上での案内であり、図4は同じくFacebookを活用した案内である。SNSを使用した広報はInstagram上でも行った。



図3 立正大学図書館ウェブサイトでの案内



図4 立正大学図書館Facebookでの案内

IV. おわりに

本地図展は、実に多くの方々に観覧頂くことができた。展示室における開催ではないので、見学者の実数は把握できていないが、立正大学熊谷図書館の協力もあり、本学学生・教職員、受験生やその保護者を中心とする来校者など、多岐にわたった。また、会場の一部となった RiLLFore の受付窓口や地球環境科学部事務室をとおり、展示内容についての複数の質問も発生した。

一方、課題としては地図の選定や設営方法、展示解説について評価しなかったことである。少人数による、しかも短期間での準備であったとはいえ、大きな反省点である。

今後急ぐべきことは、故正井泰夫名誉教授寄贈地図のデータベース化であり、学内外での情報の共有化である。地図は文字情報などの史資料とは異なり、図式と呼ばれる記号等を使用した「空間の縮小」である。作成時点の地域の景観や事象の状態を保存したものと言い換えることもできる。教育・研究組織としての視点に立てば、こうした地図類を単なる知的財産であると判断し、整理・保存するのではなく、収集者の「知識の生産過程」を知

る優れた研究史資料と認識する必要がある。また展示にあたっては、時機を得たテーマ設定や工夫に満ちた企画を立案し、広く教育へ結び付けることが重要である。そのためにも、こうした史資料を眠らせたり、孤立させることなく活用していく姿勢が求められる。

引用文献

- 太田美術館. 初公開 立正大学田中啓爾文庫 古地図・浮世絵にみる開港名品展. 1987, 80p.
- かみゆ歴史編集部編. 大江戸幕末今昔マップ. 新人物往来社. 2012, 127p.
- 人文社編集部編. 江戸から東京へ 明治の東京－古地図で見る黎明期の東京. 人文社. 1996, 88p.
- 鈴木厚志ほか. 立正大学熊谷図書館特別展「古地図・絵図 田中啓爾コレクションの世界」の記録. 地球環境研究. 2012. 14. p.67-82.
- 立正大学地理学教室創立60周年記念会 沿革誌刊行小委員会編. 立正地理の六十年－立正大学地理学教室・立正地理学会－. 1985, 198p.
- 正井泰夫. 江戸・東京の地図と景観－徒歩交通百万都市からグローバル・スーパーシティへ－. 古今書院. 2000, 123p.
- 正井泰夫. 城下町東京. 原書房. 1987, 217p.

Rissho University School's 150th Anniversary Project 'Edo/Tokyo Maps Exhibition' : Records of the exhibition of the map collection donated by Professor Emeritus Dr. MASAI Yasuo

SUZUKI Atsushi *, HORI Maki **, KAINUMA Emi *, HARA Midori *

* Faculty of Geo-Environmental Science, Rissho University

** Rissho University Kumagaya Library Librarian

Abstract :

This forum records contain the contents, map catalog, and map descriptions of the 'Edo/Tokyo Maps Exhibition', during "Faculty of Geo-Environmental Sciences Week", one of the events of the Rissho University School's 150th Anniversary. The maps on display were donated to the Department of Geography by the family of Professor Emeritus Yasuo Masai in 2013, and this was the first time to be presented to the public. The map exhibition was jointly organized by the Department of Geography and the Rissho University Kumagaya Library. The exhibition was held from June 3 to 21, 2022, at the entrance of RiLLFore on the first floor of Building No. 19 (Academic Cube) on the Kumagaya Campus of Rissho University.

Key words : Edo/Tokyo, Maps Exhibition, Professor Emeritus Dr. MASAI Yasuo